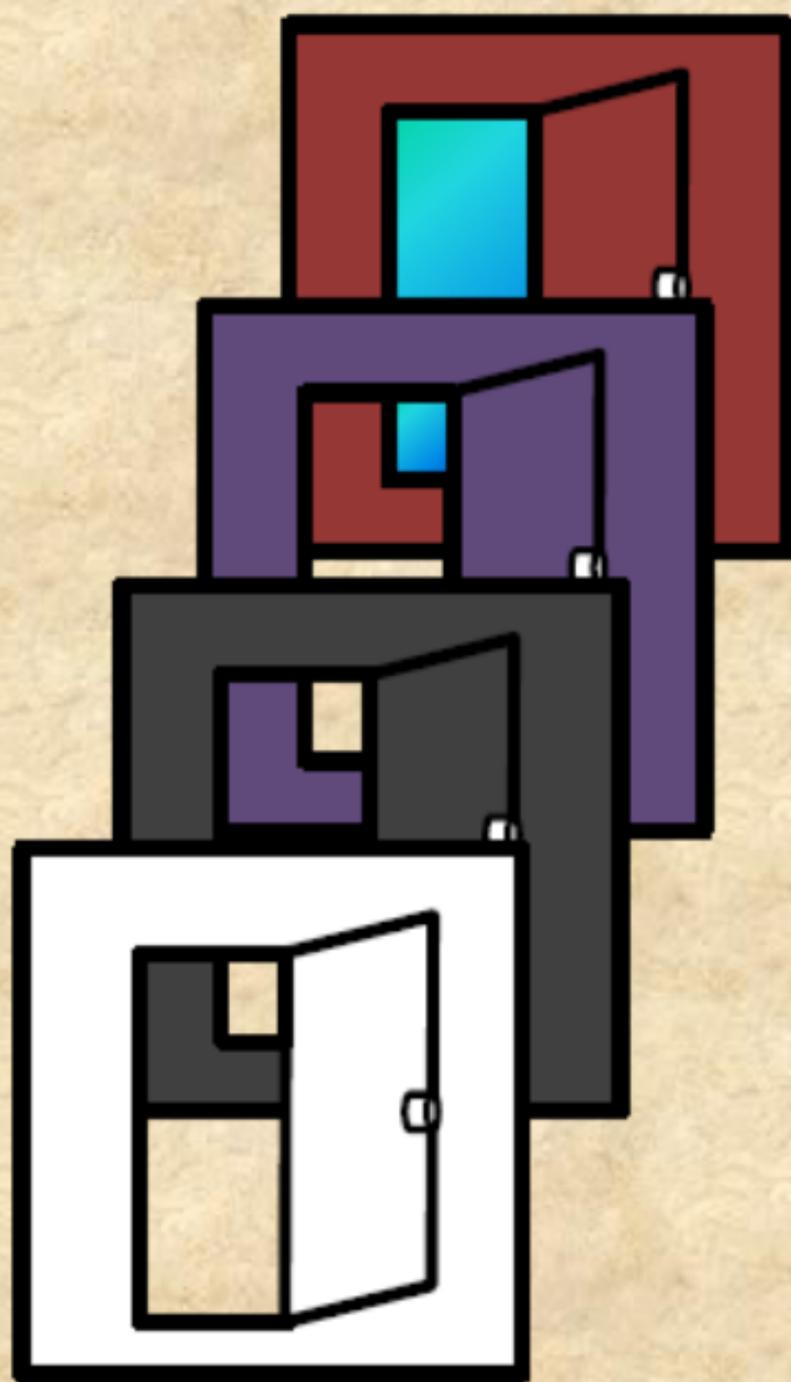


【リレー小説型

純文学ゲーム・ブック】

密室からの……



弦楽器イルカ



想像してほしい。

あなたは、ゆっくりと目を開ける。正面に白い壁が見える。自分が椅子に座っていることに気づく。足元に目を向けると、膝の高さくらいの茶色いテーブルがある。さほど大きくはない。その上に白いリモコンのような物、その脇に赤い小さな箱が置いてあるが、近づかないと詳しくはわからない。あなたは、自分の視力が良くないのかもしれないと思う。

あなたは、そもそもここはどこだ、と思う。⇒サンプルページ 1 へ

あなたは、現に、椅子だと思っていたものがただの木の板でしかなかった事を知る。⇒1 A ページへ

あなたは、何かを思い出そうとする。⇒29 ページへ

あなたは、白いリモコンを手にとってみる。⇒100 ページへ

あなたは、――。⇒〇〇ページへ

あなたは、そもそもここはどこだ、と思う。

なぜここにいるのだろう。そこであなたは気づく。そもそも、私は誰だ？自分のことが何も思い出せない。まるで鏡の表面をひっかくような、自分という当たり前の像が固く閉ざされ触れられない奇妙な感覚。これが記憶喪失か。だが今時、昼メロの主人公でさえもう少しパンチのある設定を背負うだろうと苦笑する。ということは、昼メロを観たことがあるのだと気づき、自分の軽口に少し安心する。

[あなたは、改めて部屋を見回す。⇒サンプルページ 2 へ](#)

[あなたは、――。〇〇ページへ](#)

あなたは、改めて部屋を見回す。

右手の壁の前に小さな本棚があり、中には数冊の本、上には黒い機械のような物が置いてある。相変わらずはつきり見えないが、あれはなんだろう。

あなたは、立ち上がり本棚に近づく。⇒サンプルページ 3 へ

あなたは、――。⇒〇〇ページへ

あなたは、立ち上がり本棚に近づく。

黒い機械と思っていた物は小さな拳銃だったことに少し驚く。デリンジャーとかいうガス・ライターでよく見かける形だ。実際引き金を引いたら飛び出すのは弾ではなくただの火かもしれない。

[あなたは、拳銃を手に取り、銃口をそっとこめかみに当てる。⇒サンプルページ 4 へ](#)

[あなたは、――。⇒〇〇ページへ](#)

あなたは、拳銃を手に取り、銃口をそっとこめかみに当てる。

その冷たくて固い感触があなたに何かを思い出させようとしている。今まで私は何度もこうやって……。いや、それはもう既に消し去った記憶だ。懐かしい思い出を引き剥がすように、あなたは拳銃を元に戻す。

[あなたは、ゆっくり後ろを振り返る。⇒サンプルページ 5 へ](#)

[あなたは、――。⇒〇〇ページへ](#)

あなたは、ゆっくり後ろを振り返る。

そこに白いドアがある。そうだ。次いで本棚から今度は赤い背表紙の辞書を取り出す。開くと中が四角くくりぬいてあり、そこに真鍮製の小さな鍵が入っている。あなたは思い出す。他でもない、それはあなたが入れたのだ。あなたはあの日、抱えきれないほど大きな出来事に巻き込まれたせいで、外の世界を諦めこの部屋に閉じ籠る決心をした。薬を飲んで過去も未来も流し去ろうとした。だが、諦めきれなかった。もし次に目を醒ます時が来たら。薄れ行く意識の中であなたは誓ったのだ。その時はもう一度、あのドアを開けて世界を取り戻しに行こう、と。

[そしてあなたは、鍵をさしてドアを開ける。⇒サンプルページ 6 へ](#)

[あなたは――。⇒〇〇ページへ](#)

そしてあなたは、鍵をさしてドアを開ける。

……はずだった。おかしい。なぜだ。鍵が回らない。これで間違いないはずなのに。鍵を回す手に力を入れるが動かず、ドアも開かない。しばし呆然と、ドアノブを見つめる。いったい何があったのだ。記憶を辿ろうとするが思い出せない。…誰かがいたと言うのか、この部屋に。よぎる思いが突然、無数の目に見つめられているような圧迫感を呼びさまし、辺りを振り返るがもちろん、誰もいない。よろけた拍子に足が椅子とぶつかり、そのまま力なく腰掛ける。私は閉じ込められたのか。目を閉じて、混乱した頭で考える。だがもしも、何者かが私を閉じ込めたのだとしても、意識のない私をあの拳銃で殺すこともできたはずだ。それでも生かされているということは、そこに何らかの意味があるのかもしれない。

……いや、そうじゃないと思い直す。他人に押し付けられた意味なんて関係ないのだ。命ある限り生き延びて、何者が仕掛けた罠でも解き明かしてやる。そう固く決意する。一人ではないのだ。それが今まで自分を支えてくれた、たくさんの人への恩返しになるはずだ。

支えてくれた人々を思いながら、あなたは、ゆっくりと目を開ける。⇒プロローグへ

あなたは、目を閉じて息を潜める。

かちり、と音がし、密室だと思っていた部屋の扉が、いとも簡単に開けられる。そして、パンッという軽い音がしたのと同時に、あなたは体に重い衝撃を感じる。一体何が起こったのだろう。あなたは思う。それでも、意識は混沌とし、遠退いてゆくばかりだ。

あなたは思う。闇の先には必ず光がある、と言ったのは誰だったかな。⇒プロローグへ

あなたは、テーブルの上に手を伸ばす。

あなたはまず、テーブルの上のリモコンのようなものを手にする。でたらめに押してみるが、それによって部屋が開くような気配はない。あなたは次に、赤い小さな箱を手に取ってみる。

あなたは、普通に赤い箱を開ける。⇒ 30 ページ

あなたは、グーにした右手で赤い箱を開ける。⇒ 42 ページ

あなたは、――。⇒〇〇ページへ

あなたは、仲間の事を思い出す。

あそこは、風の音がやまなかった。誰にも遮られず、誰をも遮らず、自然と共に、私たちは生きていた。木々の香り、水辺での憩い、踏みしめた大地の、熱。それに比べ、この箱の中の、澱んだ空気といったらどうだろう。自分では決して開ける事のできない、隔離された場所。あなたは、戻りたい、と強く願う。もう一度、仲間の元へ、戻りたい。

あなたは、もう一度手を動かそうと試みる。⇒ 94 ページへ

あなたは、改めて部屋を見回す。⇒ サンプルページ 2 へ

あなたは、――。⇒ ○○ ページへ

あなたは、現に、椅子だと思っていたものがただの木の板でしかなかった事を知る。連れ去られてから、どのくらい日にちが過ぎたのだろう。あなたは、自分の手を見る。ほんの数日で、肌の色艶が失われている。まだ『価値』はあるのだろうか。あなたは思い出す。私を捕えたやつらは、私をととても美しいと言っていた。やるのが惜しいな、と。

[あなたは、手を動かそうと試みて、体の自由が利かない事に気づく。⇒ 21 ページへ](#)

[あなたは、テーブルの上に手を伸ばす。⇒ 5 ページへ](#)

[あなたは、――。⇒〇〇ページへ](#)

あなたは、部屋の外からの返答を聞く。

部屋の外から、何だ、と返事が来る。

『何日閉じ込められたって、私の気持ちは変わらない！』

あなたが言うと、外から男の怒号が返る。

『愚か者が！ そのリモコンの開発に幾らかかっていると知っているんだ！ その所有権も利益も全てお前にくれてやると言っているのに、まだ分らんか！ いいか、わしの言う事に頷くまで、そこからは何があっても出さんからな！』

あなたは、男を説得する為に話を続ける。⇒ 12 ページへ

あなたは、白いリモコンをそっと頭上に持ち上げ、ゆっくりと手を離す。⇒ 22 ページへ

あなたは、男を説得する為に話を続ける。

『お父さん！ 駄々を捏ねるのもいい加減にしてください！ 結婚式まであと一週間なんですよ！』

『目を覚ませ！ 結婚など墓場だとお前の友人も言っていたろう！ そもそもあやつはお前の顔と金に目がくらんだだけだ！ お前のやつれた顔を見ればあやつとて・・・！』

『やつれるまで実の子監禁するつもりですか！？ それに好きになったのは私が先なんです！ 全く、私は何があっても田中さんと結婚しますからね！』

『おのれ、まだそんなタワゴトを抜かすか！ いいか、田中は田中でもロッキード事件が何たるかも知らんのだぞ！ ほたる～、じゅん～とかも言わんののだぞ！ 庶民なんだぞ、庶民、しょ・み・ん～～！！！！』

『田中の引き合いにそういうヘビィな二人を出さないで下さい！ 特に後者は平成生まれには厳しいですよ！ ともかく私は庶民の田中さんが好きなんです！ 仕事人間のお父さんには私の恋する気持ちが分からないんです！』

『おまえというやつは～～！』 バターン！（父入場。密室終了）

『月に行ける自家用ロケットが欲しいな♪ って言ったのはお前だろう！！！ それ！ そのリモコン！ ロケットにつけたブルーレイのリモコンだから！ 父さんは、父さんは、お前の夢を叶える為に身を粉にして働いてきたと言うのに・・・』

『七歳の時の夢を引き合いに出さないで下さい！』

『くううう～～！（地団駄）倒れた母さんが今の言葉を聞いたらどれだけ悲しむか・・・』

『切れ痔で寝てるだけでしょう！ 草葉の陰みたいな言い方やめて下さい！』

『ともかくわしは許さーん！！ 我が財閥の人間ともあろうものが庶民と結婚なんてイヤ————ッ！ もう家宝の金のクリームパンもあげないぞ（おしおき風に）』

『や、いりませんから。というかお父さん、とうとう金まで下落してしまったんですよ。あわや世界がという時にこんな事してていいんですか』

『コントにそういうシュールな話を入れるな————！ お前はいつからそんな親不孝者に～～！』

『お父さんこそ、いつからそんなキャラになったんですか・・・頼みますからもう少し空気読んで下さいよ。もう読者さんドン引きですよ・・・』

——血族ゆえの骨肉をかけた愛憎、金と権力にまみれた人間の果てしなき苦悩の物語。読み終え

あなたは、隙を見て逃げようと身構える。

部屋のドアがゆっくりと開いた。あなたは自分をここへ連れてきたやつらを見た。逃げるなら今しかない。やつらはきっと、私の体がまだ動かないと油断している。あなたは、連中が自分にぎりぎりまで近づいたのを見計らって、一度に力を籠めて立ち上がった。呆気にとられ、次の瞬間には恐怖に怯えた人々が、一目散に部屋の外へと逃げていく。あなたは、足を絡めて尻餅をついた相手の喉元に食いかかる。そして同時に、開いたドアから入り込んだ空気の匂いを感じ取る。あなたは思う。ああ、こんなやつらに構っている場合ではない。私は帰らなければ。仲間が呼んでいる。大地が呼んでいる。風が私を待っている。あなたはドアの外に向かって疾走する。どこまでも走ってゆく。遠くで人々の声がする。

『逃げやがった！ 冗談じゃねえ！ あんなアムールヒョウ二度とお目にかかれねえぞ！』

[あなたはどこまでも、走ってゆく。⇒プロローグへ](#)

そしてあなたは、夢から目覚める。

夢から目覚めたあなたの目の前には錆びた鉄製のドアがあり、それが出口と知る。ゆっくりとドアを押し開け、外の眩しさに目を細める。荒涼とした砂漠、カッと照りつける太陽。人類の大半はとうに死滅し、華やかな文明は既に崩壊している。残されたのはわずかな水や食料を求めて様々な生物が彷徨う流浪の暮らしだ。最愛の妻と生き別れたのも随分昔のことだ。

あの日、何気ない生活の中に幸福の全てが詰まっていた夢を思い出し、改めて力がわき上がるように感じてあなたはまた新たな一歩を踏み出していく。

Fin.

※このエンディングは子供の頃観たテレビ番組に、自分なりのアレンジを加えて作成しました。

あなたは、メモを読んでみる。

「お前は本当に自分で何かを探しているつもりか？

違う。ただ与えられた文章を読み、選択肢を探しているに過ぎない。

もしもお前が本当に何かを探しているというのなら、今から5分後の未来へ飛んでみる。そこから新しいページが開かれるだろう。

これ以上、誰からの指示もない。ここからは、お前が選択する番だ」

あなたは、手を動かそうと試みて、体の自由が利かない事に気づく。

あなたは、何かに打たれた事を思い出す。そして、これがそうだったのか、と思う。気をつけるよ、とずっと仲間から言われていたのに。やつらは俺たちを一発で捕えるものを持っている。いいか、絶対に判断を間違うな。捕まったら、終わりだ。あなたは、ふうと息を吐く。終わりと言う意味が、その時はよくわからなかった。けれど、終わりとは仲間と離れる事だったのだな、とあなたは思う。それならば、終わりはやはり、ひどく淋しい。けれど、同時に仕方なかったのだと諦めもできる。私か誰かが、どちらにせよ捕えられていた。今、捕われたのが私だという話なのだ。

あなたは、仲間の事を思い出す。⇒ 6 ページへ

あなたは、自分を捕えたやつらの事を思い出す。⇒ 39 ページへ

あなたは、――。⇒〇〇ページへ

あなたは、白いリモコンをそっと頭上に持ち上げ、ゆっくりと手を離す。

大きな音を立てて床に落下したりリモコンの上に、机を叩きつける。更に大きな音を立てて細かい破片が飛び散る。

「おい、何をしている！その音は、まさか」

男の声が震えているのが分かる。

「世界を救うと言ったはずだ、殺すのではない。お前たちの持つ力はこの世界を変える力なんだぞ！考え直せ！」

「私たちの種族では、それを終わりと呼んでいた。私たち妖精の力がこのリモコンで増幅されたとしても、行われるのは人類の洗脳であって癒しではない。何者も他者を救えない。自ら生きたいと願う者だけが、己が孤独と絶望的な闘いを続ける。そこに救いはなく、ただ生を望む一瞬が存在するのみだ。…今まで、私たちは誰も救えなかった。孤独から目を背ける対象として、民衆からすがり付かれていただけだったのだ」

そこで私は目を閉じ、あの笑顔を思い出す。弱い私はあの笑顔に逆にすがっていたのだ。救った気になって、うぬぼれて、過信して、ただ力を利用されあの笑顔を騙していたことにも気づかずに。

「もう終わりだ」

「やめろ！」

それでも私はこの最期の瞬間を、あの少女の笑顔を胸に抱きながら迎えたいと強く思う。あの瞬間、世界は永遠だった。私の力で癒される人間がたった一人でもいたということ、あの笑顔が証明してくれる気がするのだ。その名をそっと囁き、世界が瞳を閉じる。

「タ…マ、キ……」

fin.

あなたは、何かを思い出そうとする。

あなたがここへ来た理由。

夢のようなものです、と老人が言う。

人生はつかの間、カゲロウのように儚いもの。でしょう？

あなたは答えずに、ただ右手に持った袋を老人に突き出す。薄汚い擦り切れた袋だ。机の上にドスンと放り投げると、細かい埃が舞い上がる。老人は古びたソファに座り、目の前に置かれた袋をじっと見つめている。鋭い眼差しで、中が透けて見えるのではないかというほどに。老人がナナフシのように細長い指であなたの背後を指差す。そこに椅子があります。座って目を閉じなさい。見ると固そうな木の椅子が目にとまり、あなたはゆっくり腰掛ける。

目を閉じて。その部屋には左右に二つの梯子があります。右の梯子を登れば、金銭的に非常に裕福な生活を体験できる。左の梯子を登れば、貧しい暮らしの中でそれなりの幸福を得られる。どちらも悔いのない生涯、そのうち好きな人生を一度だけ選べる。それがあなたへの対価です。老人はそういった気がする。

現実のあなたが目を上げると、確かに右と左の壁に上へと続く梯子があるのが見える。あなたは椅子から立ちあがる。

[あなたは、右の裕福な梯子を登る。⇒ 34 ページへ](#)

[あなたは、左の貧しい梯子を登る。⇒ 43 ページへ](#)

あなたは、普通に赤い箱を開ける。

箱を開けると、こんなメッセージの書かれた一枚の紙が入っていた。『猶予をやろう。思い直すんだ。そのリモコンが何か、お前は知っているはずだ。お前は本当に、自分の名前を捨てる気か』あなたは、リモコンが何か分かるような気もするし、やはり分からないような気もする。あなたは、慄然とドアに近づき、誰か、と大声を上げる。

あなたは、部屋の外からの返答を聞く。⇒ 11 ページへ

あなたは、目を閉じて息を潜める。⇒ 4 ページへ

あなたは、――。⇒〇〇ページへ

あなたは、右の裕福な梯子を登る。

登っている途中で、重力が逆さまにあなたを引きずり上げ、あなたは空中へと落下する。真っ暗な空へと舞い上がり何度も回転し、やがて眼下に丸い月が迫ってくる。輝く月があなたを力強く吸い込むとまばゆい光に包まれ、あなたは母親のお腹から誕生する。

とても裕福な家庭に生まれたあなたは、幼い頃から何人もの召使に囲まれ、金銭的に不自由のない生活を送る。成長すると何人もの妻を召し取り、世界各国を豪遊する。華やかな生活だが、もちろん苦労も存在する。代々受け継いできた財産を他人に横取りされないよう常に目を光らせ、また何人もの妻があなたの寵愛を勝ち取ろうと互いに争うのを諫めなければならない。

その中でも特に残念だったのは20歳の頃愛した、とても美しく気立ての良い、貧しい農民の娘。野生動物のハントに出かけたあなたはたまたま出会ったその娘に一目惚れし、妻に召し抱えようとする。しかし嫉妬に駆られた他の妻たちが娘を襲う計画を企て、結果、娘は暴漢になりすました配下の男共に手酷い暴行を加えられてしまう。それを恥じた娘はそのまま行方をくらます。

もし私の元に留まってくれたら一生面倒をみてあげたのに。事件があった以上、愛することはできなかつたとしてもとても可哀想なことをした、とあなたは思う。

50歳の誕生日を迎え、たくさんの家族に暖かい祝福を受けながら素晴らしい人生を振り返り、ただもし次にあの娘と生きられるならたとえ貧しい暮らしでも満足できるかもしれない、と思っていたその時、あなたは閃光に包まれる。

[そしてあなたは、夢から目覚める。⇒ 19 ページへ](#)

あなたは、自分を捕えたやつらの事を思い出す。

私を捕えたやつらは、複数の男たちだった、とあなたは思う。やたらと、私を丁重に扱った。意識を失ってゆく私に、『悪く思わないで下さい』などと言った。今更、とあなたは苦笑する。けれど、その苦笑が、いつしか自分自身に向けたものであるような気も、あなたはしてくる。あなたは、思う。仲間の言った、『捕まる』は、今閉じ込められている事を言うのではないのではないか。そして、本当は、捕まりたかったのは私自身なのではないか。『終わり』と仲間の言った、その境遇に自分を追い込みたかったのは、私自身なのではないか。思わず気分が高まり、ドアを何度もこぶしで叩きつける。

あなたは、部屋の外からの返答を聞く。⇒ 11ページ

あなたは、ドアに向かって突進する。⇒ 80 ページ

あなたは、――。⇒〇〇ページへ

あなたは、ゲーにした右手で赤い箱を開ける。
すると、中から二つの道具がでてきた。

こ、これは・・・・・・・・

『スモークライト』と『どこでドア』！！！！

[あなたは、今、どこにでも行ける！⇒プロローグへ](#)

あなたは、左の貧しい梯子を登る。

登っている途中で、重力が逆さまにあなたを引きずり上げ、あなたは空中へと落下する。真っ暗な空へと舞い上がり何度も回転し、やがて眼下に丸い月が迫ってくる。輝く月があなたを力強く吸い込むとまばゆい光に包まれ、あなたは母親のお腹から誕生する。

貧しい家庭に生まれたあなたは、5人兄弟の末っ子として、幼い頃から畑仕事をして得た金で家計を支える。粗末な食事と不衛生な環境で、栄養失調で亡くなる子供も多い。一つ上の兄も4歳の時、激しい高熱で下痢や嘔吐が続いた後、眠るように息を引き取った。

しかしあなたは何とか生き延び、16歳で親戚のペンキ屋に弟子入りする。シンナーでクラクラしながらも独立を夢みて日々の仕事に精を出す。18歳のとき親方が借金を残し一人で失踪したため、借金取りから肩代わりを要求され、親方の家族を養いながらの返金生活が4年間続く。深夜倒れるように眠り、翌朝早くに起きては仕事場へ向かう生活。

遂に夜逃げも覚悟した頃、借金取りが過度な取り立てで摘発される。親方の借金もあなたが完済し終えていたことが発覚するが、それをどこからか聞きつけた親方が戻って来てあなたをペンキ屋から追い出してしまう。

行き場もなくヤケ酒をあおり公園のベンチで酩酊していると、女が通りかかる。薄暗い街灯でよくは見えないが、どうやら服が破れ顔や体にたくさんの傷があるようだ。驚いたあなたは酔いから醒め事情を聴くが、女は何も答えない。とりあえず警察を呼ぼうとしたが拒まれたため、仕方なくペンキ屋へ連れて行く。ペンキ屋には小さい子供たちだけで親方と妻はおらず、とりあえず自分が使っていた部屋で女を介抱する。翌日、警察がペンキ屋へやって来る。女の件かと思って話を聞くと、実は親方と妻が喧嘩の末、互いを刺し殺したと言われる。結局金目の物を持って他の女と逃げようとした親方が外に出たところを、積年の家庭内暴力を恨んでいた妻が包丁で刺し、驚いた親方もその包丁で妻の頸動脈を突いたのだ。その後、様々なゴタゴタを乗り越え、あなたは女と親方の子供たちを養うためペンキ屋を継続することになる。

数年後、あなたと女は結婚する。貧しく過酷な労働の毎日ではあったが特に大きな事件は起きず、女との間にも二人の子供をもうけ、いずれ子供たちも大きくなり巣立って行く。

50歳の誕生日を迎えたその日に診察を受け、職業病とも言える重大な呼吸器疾患が見つかる。妻と子供たちに祝福を受けながらあなたは、半生を振り返る。

遂に出会いの日の出来事について女に問いただすことはなかった。控え目な女だがたまに笑う顔が無邪気な少女のようで、本来持っていたはずの澄んだ明るさがほのかに垣間見えるような陰影を帯びた微笑が、あなたにとって切なくも愛すべき全てだった。

あなたは女の顔を見つめながら、まあ生まれてよかったと思う。どんなに裕福で苦勞のない生活を送ったとしても、人ひとりが一生に感じ取れる幸福の量など大きな個人差はなく、生まれたことに感謝する日々を送っていさえすれば幸福に死ぬ。そう信念を噛みしめていたその時、あなたは閃光に包まれる。

あなたは、ドアに向かって突進する。

そして開かないドアに向かって、何度も何度も激しく身を打ち付ける。そうして嘔つき、と自分を罵る。誰かに閉じ込められたって？

そうじゃない。鍵を飲んだのは私じゃないか。この箱の爆弾と爆破スイッチのコントロールを持って、私は自らを閉じ込めたんじゃないか。

どうして、どうしてそんな事をした？

そうだ、私はあの人の気を引きたかった。一度でいいから私を気にして欲しかった。たとえそれが一瞬であっても。

まるで密室で誰かに殺されたように装えば、あの人は振り向いてくれるんじゃないかと、私はそう願って、この身をここに置いたのだ。

あなたは号泣したまま崩れる。身を閉じ込めて初めて知る。

それでも決して、あの人は振り向かない。

[時間が戻るなら、とあなたは思う。⇒プロローグへ](#)

あなたは、もう一度手を動かそうと試みる。

あなたは、手が先程よりも動くようになっている事に気がつく。そして、逃げられるかもしれないと思う。戻れるのだ。しかし、この箱をでるのには、一体どうしたらいいのだろう。あなたはその時、ちょうど箱の外で物音がした事に気がつく。

あなたは、隙を見て逃げようと身構える。⇒ 18 ページへ

あなたは、目を閉じて息を潜める。⇒ 4 ページへ

あなたは、――。⇒〇〇ページへ

あなたは、白いリモコンを手にとってみる。

近くで見るとそれは、タッチパネル式のスマート・フォンのような物だった。画面に触れると、4つのボタンのような物が表示された。

あ	け

お	め

あなたは、「あ」のボタンにタッチする。⇒「あ」ページへ

あなたは、「け」のボタンにタッチする。⇒「け」ページへ

あなたは、「お」のボタンにタッチする。⇒「お」ページへ

あなたは、「め」のボタンにタッチする。⇒「め」ページへ

あなたは、ボタンにタッチせず辺りを見回してみる。⇒ **103** ページへ

あなたは、ボタンにタッチせず辺りを見回してみる。

ボタンのヒントになるような物があるかもしれない。

壁掛けのデジタル時計と古いポスターに目がいく。

時計は「**03 : 09**」を指している。

ポスターはだいぶ日に焼けており、「メリークリスマス！ **12月24日**、降誕祭。鈴の音が鳴り響き、その日の新たなページを開く！」と書かれている。他にめぼしいものはない。

[あなたは、赤い箱に手を伸ばす。⇒ 182 ページへ](#)

[あなたは、スマート・フォンを手にとってみる。⇒ 109 ページへ](#)

あなたは、スマート・フォンを手にとってみる。

あ	け

お	め

あなたは、ボタンにタッチせず辺りを見回してみる。⇒ [103 ページへ](#)

あなたは、赤い箱に手を伸ばす。
中にはメモが一枚入っている。

あなたは、メモを読んでもみる。⇒ **20** ページへ

あなたは、スマート・フォンを手にとってみる。⇒ **109** ページへ

3時4分。

あなたはデジタル時計を壁から外し、手に取って時刻を5分前にセットする。

次の瞬間、音よりも早く振動が衝撃波となってあなたを吹っ飛ばした。すさまじい爆発に巻き込まれたあなたは、何が起きたかわからぬまま帰らぬ人となる。

Fin.

3時14分。

あなたはデジタル時計を壁から外し、手に取って時刻を5分後にセットする。すると、電池のフタが開き中からまたメモが出てくる。

「【音】であって、【乙女】でなく、【お得】でもなく、【囿】ではない。

然らば、【乙女】には【飯】を、【お得】には【櫛】を、【囿】には【利子】を与えよう」
メモに書かれているのはそれだけだ。

あなたは、スマート・フォンを手にとってみる。⇒ [109](#) ページへ

12月24日。降誕祭。

ポスターをはがすと壁がくり抜いてあり、そこに靴下のキーホルダーが付いた鍵が置いてある。

「おめでとう！それが脱出の鍵だ。さあ、扉を開けて外へ飛び出そう！」

そしてあなたはこのオンライン・テーマパーク内にある、密室型アトラクションの最短脱出記録保持者となる。

「最短記録樹立の記念として、あなたには特典が与えられます。これから新しく設計されるオンライン・密室型アトラクションを、あなたが自由にデザインできる権利です。この密室を脱出できたあなたこそ、その権利を得るにふさわしいでしょう！さあ、あなたが導く新しい密室の扉が、今閉ざされます！」

さてどうしよう、とあなたは思う。あなたなら次に、いったいどんな密室にプレイヤーを封じ込めるだろうか？

[想像してほしい。⇒プロローグへ](#)

12月31日。大晦日。

歳末バーゲンとかで賑わっている。どうもこの日ではないようだ。もう一度チャンスをやろう。もっと聖なる感じの何かだ。

あなたは、「あ」のボタンにタッチする。

すると液晶画面からボタンが消え、何も映らなくなる。それ以降、何をどうしてもその密室から脱出できず、あなたは息絶えることになる。

Fin.

「お」 ページ（弦楽器イルカ：作）

あなたは、「お」のボタンにタッチする。
液晶画面に、新しい文字が表示される。

こ	と

よ	ろ

あなたは、「け」のボタンにタッチする。

すると液晶画面からボタンが消え、何も映らなくなる。それ以降、何をどうしてもその密室から脱出できず、あなたは息絶えることになる。

Fin.

あなたは、「ク」のボタンにタッチする。

液晶画面に、新しい文字が表示される。

「【お得】には【ク死】を与えよう。」

突然天井が割れて巨大な櫛状の金属がドスンと降ってくる。頭や胴、足が串刺しになり大量の出血であなたはショック死する。

Fin.

あなたは、「め」のボタンにタッチする。

すると液晶画面からボタンが消え、何も映らなくなる。それ以降、何をどうしてもその密室から脱出できず、あなたは息絶えることになる。

Fin.

あなたは、「メ」のボタンにタッチする。

液晶画面に、新しい文字が表示される。

「【乙女】には【メ死】を与えよう。」

突然天井が割れて大量の何かがズドンと降ってくる。口や目に強引に入り込むそれが米粒だと気づいた時、あなたはその重圧に押しつぶされて窒息死する。

Fin.

あなたは、「と」のボタンにタッチする。

「チリリン」と、壁際でベルのような音が鳴った気がする。

液晶画面に、新しい文字が表示される。

メ	リ

ク	リ

あなたは、「よ」のボタンにタッチする。

「およ」

すると液晶画面からボタンが消え、何も映らなくなる。それ以降、何をどうしてもその密室から脱出できず、あなたは息絶えることになる。

Fin.

あなたは、「リ」のボタンにタッチする。

液晶画面に、新しい文字が表示される。

「【囧】には【リ死】を与えよう。」

突然天井が割れて大量の金属がザザザと降ってくる。無数のつぶてのようなそれが硬貨だと気づいた時、全身の骨が折れるほどの重みであなたは圧殺される。

Fin.

「ろ」 ページ（弦楽器イルカ：作）

あなたは、「ろ」のボタンにタッチする。

「おろ」

すると液晶画面からボタンが消え、何も映らなくなる。それ以降、何をどうしてもその密室から脱出できず、あなたは息絶えることになる。

Fin.

「こ」 ページ（弦楽器イルカ：作）

あなたは、「こ」のボタンにタッチする。

「おこ」

すると液晶画面からボタンが消え、何も映らなくなる。それ以降、何をどうしてもその密室から脱出できず、あなたは息絶えることになる。

Fin.

【リレー小説型
純文学ゲーム・ブック】
密室からの……



【リレー小説型純文学ゲーム・ブック】密室からの……

<http://p.booklog.jp/book/35084>

著者: 弦楽器イルカ と
: 戸田環記さん

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35084>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35084>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)
運営会社: 株式会社 paperboy&co.